

ヨハネによる福音書4章27-54節 「言葉による宣教」

1A 証言を信じる人々 27-42

1B 宣べ伝える女 27-30

2B 収穫の時 31-38

1C 御心を行う満足 31-34

2C 種蒔く者と刈る者 35-38

3B 証言を確かめる者たち 39-42

2A しるしを求める人々 43-54

1B 表面的な歓迎 43-45

2B 御言葉に対する信仰 46-54

本文

ヨハネによる福音書4章の後半を見ていきます。27 節からですが、これはサマリアの女の話の続きです。

26 節でイエス様が、ご自身が「わたし」である、メシアであると明かされました。ヨハネの福音書には、「わたしは、何々である」という宣言が多いです。かつて主が、モーセに、「わたしは、『わたしはある』という者である。」として、ご自身を明かされましたが、イエス様はそれと同じ言葉を使われて、ご自身がモーセに現れた主ご自身であること証言しておられたのです。26 節も同じです、「あなたと話している、この『わたしである』と訳したほうがよいのでは？と思われます。神と会う、またはイエス様と会う、ということは、こういうことだと思います。理屈が要りません。その方がその方として現れてくださり、この方に会うことによって、人は変わります。いのちを持ちます。知ることができます。

1A 証言を信じる人々 27-42

1B 宣べ伝える女 27-30

27 そのとき、弟子たちが戻って来て、イエスが女の人と話しておられるのを見て驚いた。だが、「何をお求めですか」「なぜ彼女と話しておられるのですか」と言う人はだれもいなかった。

弟子たちが食事のためにいなくなっていました。イエス様が女と話しているのでショックを受けました。まずもって、男が公の場で女の人に話すことはまれです。ユダヤ教の教師、ラビが話すことは、スキャンダルになります。自分の妻とでさえ、長いこと話すのは疑問視されます。しかも、ふしだらな女で、他の女たちのいない違う時に来ているのですから、ますますスキャンダルです。しかし、弟子たちは、敢えて尋ねませんでした。イエス様が、何かを考えて、そのことを行われている

と信頼していたからです。イエス様はこれから、他の福音書を見れば、取税人や遊女たちとも食事をするようになります。一人一人が悔い改めて、神に立ち返るためには、タブーに思われていることも打ち破って、接して、近づいていきます。

28 彼女は、自分の水がめを置いたまま町へ行き、人々に言った。29 「来て、見てください。私がしたことを、すべて私に話した人がいます。もしかすると、この方がキリストなのでしょうか。」30 ここで、人々は町を出て、イエスのもとにやって来た。

「自分の水がめを置いたまま町へ行き」とあります。女は、これまでの日常を忘れました。キリストが来られたかもしれないという大きな喜びで、それをそのまま町の中にいる人々のところに行ったのです。「来て、見てください。」という言葉、思い出せますか？ピリポがナタナエルに、「来て、見なさい。」と言いましたね。いろいろな理屈をこねるのではなく、ともかくも来て、見てくださいということです。先ほど話したように、この方に会うということで、すべてを知ることができるのです。

女は、「すべて私に話した人がいます」と言っています。すべて、というのは、もちろん彼女についてのすべての情報のことではありません。彼女が、人には隠しているような、恥ずべき男との遍歴です。それらをイエス様は語られて、女は、自分が神に渴いていることを知ったのです。自分に、生ける水、神の御霊が霊に注がれると、人はその喜びを人々に伝えようとして。

それから興味深いのは、「人々は町を出て」とあることです。ここから、彼女はある程度、サマリアの町の人々に知られていたことが分かります。彼女が、そういった男との遍歴があることも知っていたのでしょう。つまりは、彼女は、その喜びのゆえに恥も顧みずに、人々に伝えに行ったということです。人々に、証しをすることを、自分の負い目に触れることなのでためらうクリスチャンが多くいます。けれども、その負い目、弱さがあってそこでイエス様に触れていただいたからこそ、人々はイエス様に飢え渴きを持つようになるのです。

2B 収穫の時 31-38

1C 御心を行う満足 31-34

31 その間、弟子たちはイエスに「先生、食事をしてください」と勧めていた。32 ところが、イエスは彼らに言われた。「わたしには、あなたがたが知らない食べ物があります。」33 そこで、弟子たちは互いに言った。「だれかが食べる物を持って来たのだろうか。」34 イエスは彼らに言われた。「わたしの食べ物とは、わたしを遣わされた方のみこころを行い、そのわざを成し遂げることです。」

イエス様は、サマリアの女に対してと同じように、弟子たちに対して、物質的なものから、霊的なこと、御霊に関することを語られています。弟子たちは、食事を用意したのに、イエス様は、「わたしの父に遣わされた理由、その願われていることを行ったので、とても満足している」ということを

語られているのです。主は、ご自分にある永遠のいのちの知らせを伝えるために、この世に来られました。それが神の御心です。その御心を果たすことができたので、その深い満足感のために、その喜びでお腹が空いているのを忘れてしまうほどだったのです。私にも、この思いが与えられています。いつもはお腹が空くのに、人がイエス様のことを知りたいと願っていて、それでこの方を救い主として信じて、受け入れる現場にいたら、お腹が空いているのを忘れていました。人が救われる現場に居合わせることは、なんとすばらしいことでしょうか！

ところで、サマリアの女の話などから、イエス様の伝道の姿勢から多くを学ぶことができます。イエス様は、神のことは神のことで、生活や社会のことは神とは関係のない、世的なことだとして分離しませんでした。主は、とても生活に密着しておられる方です。社会のことをよく知っておられる方です。水を飲みたいのであれば、素直に水を飲ませてくれとお願いし、その現場から、霊のいのちについて、永遠の命についてお語りになりました。ここでは、弟子たちを教えられる時に、目の前にある食べ物から、福音を伝えるという神の御心についてお語りになっています。ゆえに、人々がそれを聞いた時に、自分たちのよく知っているところで、イエス・キリストにある永遠のいのちの話聞くこととなります。伝道とは、実は神が生活や社会のあらゆるところで働いている、生きておられることを知って、それを聞いていく作業かもしれません。そして、人々の生活をその人たちの話から聞いていくことから、始まるのかもしれませんが。伝えるのですが、聞いて伝えるのです。自分が話すこと以上に、人から聞いていき、その人の飢え渴きを知り、それで語り始めるのです。

2C 種蒔く者と刈る者 35-38

35 あなたがたは、『まだ四か月あって、それから刈り入れだ』と言ってはいませんか。しかし、あなたがたに言います。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。36a すでに、刈る者は報酬を受け、永遠のいのちに至る実を集めています。

イエス様は、食べ物から、畑の収穫の喩えを使って、福音を宣べ伝える喜びについて話しておられます。他の福音書にも、四つの種類の土の喩えや、畑に良い麦、悪い麦が生えたという喩えなど、魂が救われることを収穫に喩えておられますね。「まだ四か月あって、それから刈り入れだ」というのは、諺としてあったのだと思います。けれども、実はもう刈り入れの時が来ているという宣言です。必要なのは、働き人です。収穫をするための働き人です。

ユダヤ人にとって、サマリア人は、まるで全き人間ではないような見下げ方をしていたことでしょう。異邦人とはみなしていませんが、けれども、ユダヤ人になりきれない、血縁的にも、宗教的にも、ユダヤ人ではないとみていると思います。だから、彼らも神の救いを得るためには、改宗の手続きを経て、ユダヤ教徒になってそれで初めて救われ、神の国に入れるというのが、彼らの神学でした。しかも、ユダヤ人には敵対的な人たちです。神の国に入るのは、まだ遠くにいると思われていた人々です。ところが、こんなにも早く、イエス様を自分たちの救い主として信じているのです。これ

が、「色づいて、刈り入れるばかりになっています」ということです。

私たちは、頭の中でどうしても、「この人は、まだまだ福音を信じて受け入れるには、遠い。」と思えてしまう人がいるかもしれません。けれども、実はサマリアの女や、町の中の人々のように、もう刈り入れるばかりになっているのかもしれないのです。みなさんの周囲に、イエス様を知らない人たちがいて、どうしてもあと四か月はかかる、と思ってしまうかもしれません。けれども、実はもう刈り入れるばかりになっているのかもしれないのです、そう思って、何とかして福音によってその人に届こうとするのです。

宣教を世界に目を移すと、ソ連が崩壊したロシアで、人々がたくさんイエス様を信じていきました。文化大革命が終った中国で、記録的な数の中国人が信仰を持ってきました。イランでは、イスラム革命が起こった後から、とてつもない数のイラン人がイエス様に出会っています。どちらも共産主義という無神論、反キリスト教的なイスラムの中に生きていた人たちです。けれども、だからこそ、霊は飢え渴き、福音を語ればすぐに受け入れていったのです。思えば、金賢姫という、大韓航空機を爆破させた北朝鮮工作員がキリスト者となりました。難しくなかったのか？と尋ねられると、「頭を変えればよかったです」と答えました。頭を金日成からキリストに変えれば、そのまま体を変えられたただ、とのことです。この人はほど遠いと思われる人々が、実は近いのです。

36b それは蒔く者と刈る者がともに喜ぶためです。37 ですから、『一人が種を蒔き、ほかの者が刈り入れる』ということばはまことです。38 わたしはあなたがたを、自分たちが労苦したのでないものを刈り入れるために遣わしました。ほかの者たちが労苦し、あなたがたがその労苦の実にあずかっているのです。」

種を蒔く人たちと、刈り取る人たちの両方がいます。神の言葉の種を蒔いた人が、必ずしも自分の手で人々がイエスを救い主と信じていくわけではありません。けれども、刈り取る人がその魂を勝ち得た時に、種まきをした人々も喜ぶのです。ですから、ここにチームでの働き、協働が必要になります。とかく伝道となると、自分で刈り取らなければ意味がないと思っています。けれども、自分の遣わされている場で、どれだけ、種蒔きの働きをしているかで、刈り取りができるのです。「126:5-6 涙とともに種を蒔く者は喜び叫びながら刈り取る。種入れを抱え泣きながら出て行く者は束を抱え喜び叫びながら帰って来る。」そして、パウロはこう励ましています。「ガラ 6:9 失望せずに善を行いましょう。あきらめずに続ければ、時が来て刈り取ることになります。」

そして弟子たちに、「自分たちが労苦したのでないものを刈り入れるために遣わしました」と言われていますが、これはおそらく、後に弟子たちがサマリア伝道して、そこで多くがイエス様の名を信じることを指しているものと思われます。「使 8:5-6 ピリポはサマリアの町に下って行き、人々にキリストを宣べ伝えた。群衆はピリポの話を聞き、彼が行っていたしるしを見て、彼が語ることに、そ

ろって関心を抱くようになった。」主が、既にサマリアの女に語った、その種蒔きで、後に使徒や伝道者たちが行ったときは、刈り取ることができたということです。これも、数多く起こります。アフリカ大陸にて、前世紀になって前代未聞の大リバイバルが起こります。今、五大陸の中で、プロテスタントの人口が多いのは、アフリカです。しかし、アフリカは何百年も宣教師が行き、福音を伝えていたのに、多くは信じなかった所なのです。今の宣教師たちは、先代の宣教師たちの労苦によって、今、刈り取りができています。

3B 証言を確かめる者たち 39-42

39 さて、その町の多くのサマリア人が、「あの方は、私がしたことをすべて私に話した」と証言した女のことばによって、イエスを信じた。40 それで、サマリア人たちはイエスのところに来て、自分たちのところに滞在してほしいと願った。そこでイエスは、二日間そこに滞在された。

彼らは、イエスから直接、話を聞くためにいっしょに滞在してくれるように願い出ました。この「滞在する」というギリシア語は、ヨハネの福音書に多く出てくる、メノウです。留まるとも訳され、イエス様のことばに留まることが強調されています。表面的にみことばを聞くのではなく、じっくりとそこに留まっているのです。

41 そして、さらに多くの人々が、イエスのことばによって信じた。42 彼らはその女に言った。「もう私たちは、あなたが話したことによって信じているのではありません。自分で聞いて、この方が本当に世の救い主だと分かったのです。」

女の言葉だけではなく、自分で直接イエスからみことばを聞きました。そして信じています。使徒の働きに出てくるベレヤの人々も、同じ態度を持っていました。「使 17:11-12 この町のユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも素直で、非常に熱心にみことばを受け入れ、はたしてそのとおりかどうか、毎日聖書を調べた。それで彼らのうちの多くの人たちが信じた。また、ギリシアの貴婦人たち、そして男たちも少なからず信じた。」自分たちで聞いて、それで確かに女の言った通りだと確認して、確かにこの方が世の救い主であると知ったのです。この、サマリアの町での小さな信仰が、先ほど話しましたように、伝道者ピリポが福音を伝えになったら、大きなリバイバルとなっていくのです。

2A しるしを求める人々 43-54

そしてイエス様は場所を移されます。元々の目的地、ガリラヤです。サマリアでの福音宣教と、ガリラヤでのそれでは、あることが違います。

1B 表面的な歓迎 43-45

43 さて、二日後に、イエスはそこを去ってガリラヤに行かれた。44 イエスご自身、「預言者は自

分の故郷では尊ばれない」と証言なさっていた。45 それで、ガリラヤに入られたとき、ガリラヤの人たちはイエスを歓迎したが、それは、イエスが祭りの間にエルサレムで行ったことを、すべて見ていたからであった。彼らもその祭りに行っていたのである。

ガリラヤに戻られたら、ちょうど過越の祭りでエルサレムに行っていて、そこでイエス様がしるしを行われているのを見ることができました。それで、イエス様を大歓迎しています。ところが、「イエスご自身、「預言者は自分の故郷では尊ばれない」と証言なさっていた。」とあります。大歓迎されて、尊ばれているのに、どうしてこの言葉が出てくるのでしょうか？他の福音書では、ナザレの会堂でイエス様ご自身がこの言葉をもって、彼らが受け入れないことを証言されていましたが、ここはナザレではないようです。では、なぜこの歓迎をもってして、尊ばれていない、つまり受け入れられていないとするのか？を考えてみたいと思います。

主が、エルサレムにてしるしを行われていた時のユダヤ人たちのことについて、使徒ヨハネが説明してくれています。「2:23-25 過越の祭りの祝いの間、イエスがエルサレムにおられたとき、多くの人々がイエスの行われたしるしを見て、その名を信じた。しかし、イエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかった。すべての人を知っていたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。イエスは、人のうちに何があるかを知っておられたのである。」彼らは信じたといっても、それは、しるしを見たからであり、とても表面的なものでした。だから信じたと言っているけれども、本当はそうではないことを主は知っておられたので、主ご自身は彼らに自分をお任せになりませんでした。これは、福音宣教における現実ですね。四種類の土への種蒔きの喩えにもありますが、岩地に蒔いた種は、すぐに芽を出すけれども、日が照ると枯れてしまいます。

ここで一つのパラドックス、逆説的なことが起こっているのです。サマリアの人たちは、ただイエスご自身がすべてを知っているということだけで、イエスの言葉を聞いただけで信じたのに対して、神に選ばれた民、契約の民のほうは、しるしを求めていて、御言葉に対する信仰ではなかったのです。私たちにも、これは大きな警鐘です。恵みを受けていればそれだけ、成長するのか？とすると、むしろ恵みを無駄にすることがあります。恵まれているから、かえって無駄なもの、安価なものを求めることもあります。そして、飢え渴いている人々は、恵みが与えられた時にそれを恵みとして受け入れる心の素地があるともいえるのです。これが、主が語られた心の貧しい者は幸いである、義に渴いている者は幸いである、と言われた所以です。

2B 御言葉に対する信仰 46-54

46 イエスは再びガリラヤのカナに行かれた。イエスが水をぶどう酒にされた場所である。さてカペナウムに、ある王室の役人がいて、その息子が病気であった。47 この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞いて、イエスのところに行った。そして、下って来て息子を癒やして下さるよう願った。息子が死にかかっていたのである。

主が第一のしるしを行われたのが、ガリラヤのカナでした。それから、イエス、弟子、イエスの家族がいっしょにカペナウムに滞在したことが、ヨハネ 2 章に書かれていました。その初めの場所、カナに再び行かれました。そうすると、滞在したことのあるカペナウムから、王室の役人がやってきたというのです。カナとカペナウムは結構な距離があります。30 キロ離れています。カペナウムはガリラヤ湖の湖畔にある町ですが、そこは海拔マイナス 200 くらいのところにあります。ヨルダン溪谷という、海拔マイナスのところまで低くなっているところです。ですから、高低の差も大きくて、約 600 くらいあります。カペナウムからカナまで、600 くらい高いところに上っていくのです。

王室の役人ですから、ヘロデ・アンティパスの役人でしょう。ガリラヤの首都はティベリアにありましたが、この役人はカペナウムに住んでいたようです。彼は地位や富も持っていたにも関わらず、それでもこの長い道のりを、わざわざイエスに会うためにやってきたのです。それは、息子が瀕死だったからです。富をもってしても、地をもってしても、何をしても、自分にはどうしようもなくなってしまったことがでていました。人は、自分が自由であると、自分でできると思い、神は要らないとします。しかし、何もできない状態だからこそ、実は自分は神に支えられていることを悟ります。

48 イエスは彼に言われた。「あなたがたは、しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じません。」
49 王室の役人はイエスに言った。「主よ。どうか子どもが死なないうちに、下って来てください。」
50 イエスは彼に言われた。「行きなさい。あなたの息子は治ります。」その人はイエスが語ったことばを信じて、帰って行った。

王室の役人は、やってきた時は他のガリラヤのユダヤ人たちと同じでした、しるしと不思議を見ないと、信じないと、イエス様ははっきりと言われたのです。そこから彼は、イエスの語られた言葉を信じたのです。そうです、サマリア人たちがイエス様を信じたのと同じように、その言葉を聞いて信じたのです。「イエスが語ったことばを信じて、帰って行った。」とあります。息子が治る前に、治ったのを見る前に、イエスが語られたということだけで信じたのです。

51 彼が下って行く途中、しもべたちが彼を迎えに来て、彼の息子が治ったことを告げた。52 子どもが良かった時刻を尋ねると、彼らは「昨日の第七の時(午後 1 時)に熱がひきました」と言った。
53 父親は、その時刻が、「あなたの息子は治る」とイエスが言われた時刻だと知り、彼自身も家の者たちもみな信じた。54 イエスはユダヤを去ってガリラヤに来てから、これを第二のしるしとして行われた。

父とその家族が信じたのは、イエスに力があり、その言葉に力があることを知ったからです。第一のしるしであったカナの婚礼における奇跡は、水がぶどう酒に変わったことでありましたが、それは、イエスが確かに、無から有を創造する神であることを証しされていました。そこに、神の栄光が現れていました。そしてここでは、神が言葉によって、被造物を支配しておられるという栄光が

現れたのです。「光、あれ」と神が言われたら、光がありました(創世 1:3)。この方は、その言葉によって支配しておられるというところで、神から来た方であり、神ご自身なのです。その栄光を彼らは見て、信じたのです。

したがって、しるしと不思議は、神の力を表す大切な証しであるけれども、そこに本質があるのではないことを知ります。マルコの福音書の最後に、こうあります。「16:20 弟子たちは出て行って、いたるところで福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしるしをもって、確かなものとされた。」福音は、神の言葉を語ることです。そして、しるしは、言葉に伴うものであり、みことばを確かにします。「ロマ 1:16 私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」救いをもたらす、神の力です。